

私の父と母は戦前に生まれ、小さな子供のときに戦争が終わったので、最初期に戦後の民主主義教育を受けた世代だと思います。そして大学で東京に出てきて就職し、結婚して家庭をつくるという、地方に実家がありながら東京近郊で暮らす、戦後の典型的な核家族ですね。そのためにもリベラルな考え方を持っていて、前の世代のように自分の希望を子供に強要するということはありませんでした。住んでいた場所も大きな新興住宅地だったので、友人の親たちは年齢や年収が大体同じという、近代主義や民主主義によって高度に平均化された環境で育ちました。

ちょうど小学校5、6年生のころでしようか、テレビで機動戦士ガンダムと未来少年コナンというアニメの放送が始まりました。私は1970年代の家族ドラマに出てくるような、元気のよい優等生な主人公「コナン」には感情移入ができなかったのですが、ガンダムの「アムロ」のように、基本的に引込み思案だったのが、否応なく戦争に参加させられ、その経験を糧の一つ一つ成長していくという、巻き込まれ型の主人公にはとても共感した



日本の集落 田麦俣 (山形県鶴岡市)

当時の武蔵工大には、広瀬謙二先生という建築家が教えていました。戦後、日本がまだ貧しかったころから、SH（スチールハウス）シリーズという前衛的な鉄骨の住宅をつくり続けていた人です。その住宅は余分なものがないコンテナのようで、一般的な住宅のイメージからはかけ離れたものでした。それは社会のためになるという工学の役割を徹底した結果に、むしろ美しいといえるほどの緊張感を獲得しているように見えました。

大学院で東京芸大に行くと、研究室の片山和俊先生は吉村順三先生の教え子で、他の先生も吉村先生に薫陶を受けた方々でした。芸大というと前衛的な印象があったのですが、吉村先生の作品を見ると、美学というよりは私たちの生活の延長線上にある、むしろ



客家土楼 (福建省)

ろ工学に近いように感じたのです。私の特長は、このように工学部と美術学部の両方で学んだことがあります。工学部なのに美学的であったり、美術学部なのに工学的であったり、それぞれの学校の「ねじれ」が非常に面白かったですね。この相反する2面性のようなものは、当時の私に大きな影響を与えました。

大学院の研究室では、中国の福建省にある「客家」という集落を調査しました。3〜4階建ての、円環形をした集合住宅です。その中に一族が数十家族

高度経済成長の時代 のびのびと少しひねくれて育つ

ことを覚えています。

そのころの社会には、親の世代より豊かになるのが当然という空気があったように思います。小さいころから大きな目標を持ち、努力して有名になるというような、前時代的な生き方ばかりかという悪いという雰囲気の中に私もいました。勉強は自分の学力にあった学校に進み、スポーツなどのクラブ活動

もやり、その中で自分のやりたいことが見つかるばいいという生き方ですね。このような考え方は、今のゆとり世代や草食男子という傾向の兆しだったのかもしれませんが。

相反する2面性と集落調査 社会の既成概念を考える

私の場合、やりたいことが見つからなかったのが（笑）、ものづくりが面白そうだなという漠然とした思いから理系を選び、大学で武蔵工大（現東京都市大）の建築学科に進むことになりました。

建築の歴史をリサーチし、 既成概念をリセットする



福島 加津也 *Katsuya FUKUSHIMA*

社会の既成概念を深く考え、
建築の歴史性と現代性の関係を再構築する。



工学院大学ボクシング場施工現場 撮影:小川重雄



工学院大学ボクシング場 撮影：小川重雄



江川家（静岡県田方郡韮山）



東大寺南大門（奈良県奈良市）

全く違うものとして、現代の木造建築の可能性を広げたいと思いました。今回の共通する考えは、日本の古建築で使われていた技術です。アカネ材は12センチの角材なので、

この正方形の木材を使って梁をどう架けるかということがテーマになりました。そこで、古い寺社建築の軒先の架構のように短い部材の上に積み重ねることにしました。これを力強い空間が求められたボクシング場に使っています。弓道場には断面の小さな下地材を貫として用い、伝統的な民家のような格子状の架構を作りました。これにより、繊細で緊張感のある弓道にふさわしい空間ができたように思います。

この2つの作品で、去年ぐらいから海外から声をかけていただくことが増えました。明快な構成で現代的であるにも関わらず、どこか日本の伝統を感じさせることが評価のポイントのようです。

工学院大学が創立125周年事業の一環として弓道部とボクシング部の練習場を作ることになり、パートナーである富永祥子が教員をしている縁で私たちの事務所に設計の依頼がありました。大学からは持続型社会への環境貢献という観点から、再生素材である

日本建築の伝統から 現代の木造建築の可能性を開く

木材を使って大学の施設を建てたいという要望があり、建築学科の後藤治先生から優秀な材木屋さんを紹介していただきました。その社長さんに、木材の市場に連れて行ってもらったのですが、そこにはまるで築地の魚市場のように多様な木材があり、デザインを始める前にとっても刺激を受けました。

その中に、アカネ材というヒノキで虫食いの被害を受けた木材がありました。しかし虫食いの跡も小さく、行政が性能保証をしているので品質的にも問題ありません。こうして、ヒノキを安く手に入れることができました。それから、外壁を留める下地用の小さい木材が、乾燥技術と機械鉋の精度の向



工学院大学弓道場構造モックアップ



工学院大学ボクシング場構造モックアップ



工学院大学弓道場施工現場 撮影：小川重雄



客家土楼（福建省）

と一緒に住んでいるのです。それは大変珍しいライフスタイルでした。それまで、私たちの生活の中にある気持ち良さのような身体的な感覚は、みんな一緒なのだろうと思っていたので、衝撃を受けました。

この調査の後、自分がなんとなく信じている常識は、「既成概念」として社会から信じ込まされているもので、現実の世界とは違うのかもしれないと思うようになりました。そして、日本のライフスタイルについても興味があり、日本中の伝統的な集落を見に行く



日本の集落 広兼邸（岡山県高梁市）



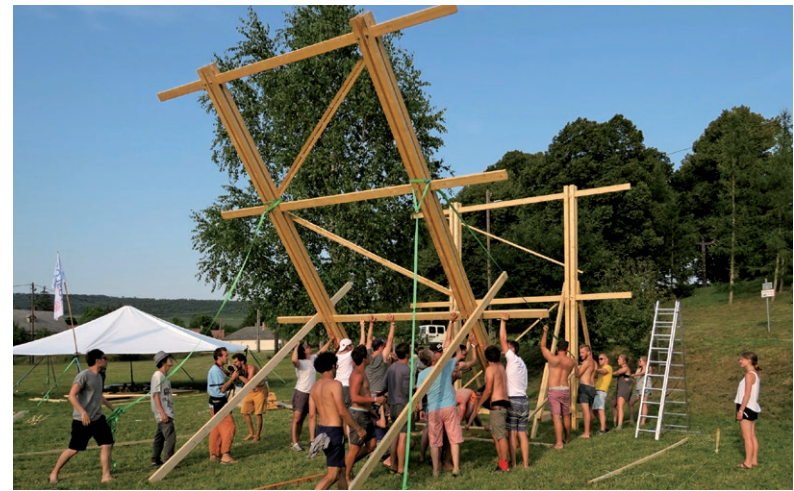
日本の集落 伊根（京都府与謝郡）

ことにしたのです。実家のクルマを借りて、その中で寝泊まりして、山形県から熊本県まで1ヶ月間で6000キロ、全部で40ぐらいの集落を調査しました。この客家の集落と、日本の集落の2つの調査の経験が、社会の既成概念を深く考える私の原点になっています。

既成概念をリセットして新鮮な発想を得る

日本の集落調査の時、いくつかの現代建築も同時に見たのですが、良いと思えるものはありませんでした。しかし、伊東豊雄さんの熊本にある「八代市立博物館」だけは集落の長い時間の蓄積に負けない建築の強さを持っていました。それが伊東事務所に入りたいと思ったきっかけです。

伊東事務所はチーフ、中堅、新人というスタッフの序列がはっきりとした通常の設計事務所と違い、伊東さんが新人に対して「お前がやれ」という世界でしたから、幸運にもすぐにコンペから現場まで担当する機会に恵まれました。大変厳しい事務所でしたが、コンセプトのつくり方や、テーマ設定などの道筋さえ通ってれば、かなり自由にデザインすることが許されていたように思います。厳しくも自由な伊東事務所です仕事をしているうちに、オランダで1年間仕事をすることになりました。英語が苦手な私が英語で建築の専門的なコミュニケーションをした経験は、当時の私にとって大変貴重なものでした。日本



ハンガリーでの国際ワークショップ

人が日本語で考えると、既成概念ありきでスタートしてします。しかし、英語で考えると既成概念がいったんリセットされるので、専門分野でも新鮮な発想ができるという実感がありました。このオランダでの仕事がつきかけとなり、伊東事務所を独立することになりました。



長谷川香料株式会社新社屋外観

長谷川香料株式会社は、日本の香料産業の創成期である明治36年に香料を取り扱う個人商店として創業。その後、昭和23年には法人組織となり、日本経済の復興とともに業績を拡大させてきた総合香料メーカーです。同社は2016年4月、中央区日本橋に地上8階建て、延べ床面積4,045㎡の新本社社屋を建設しました。

適なレイアウトを実現。ハイルフ車にも対応した駐車スペースを確保することができました。さらに、ターンテーブルの内蔵で、よりスピーディーな入出庫も可能に。ユーザーの利便性と快適性を追求する日精は、最先端のパークシステムを提供することで、これからも新しい時代のニーズにお応えしてまいります。



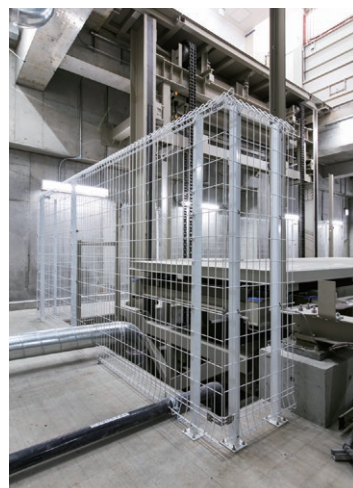
乗り込み口スペースオートドア開閉時



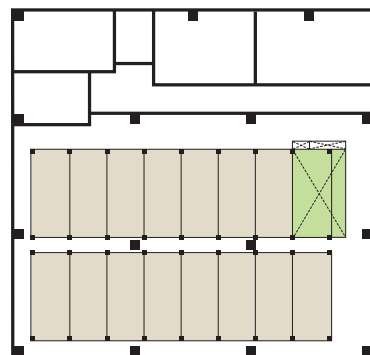
間口を広く取ることで、バリアフリーの通路幅を確保



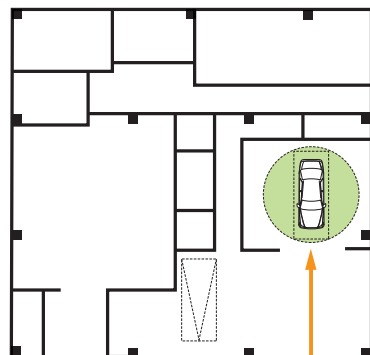
昇降リフト



リフト周りに安全柵を設置



据付階平面図



乗込階平面図

【建築概要・規模】

- 建築主／長谷川香料株式会社
- 延床面積／4,045㎡
- 構造規模／地上8階、地下1階
- 設計・監理／浅井謙建築研究所株式会社
- 施工／東急建設株式会社首都圏建築支店

【駐車設備概要】

- 機種／フレキシブルパーク(水平循環方式)
- 型式／FLX1LSWRH1-14(1)FDHT-BN1

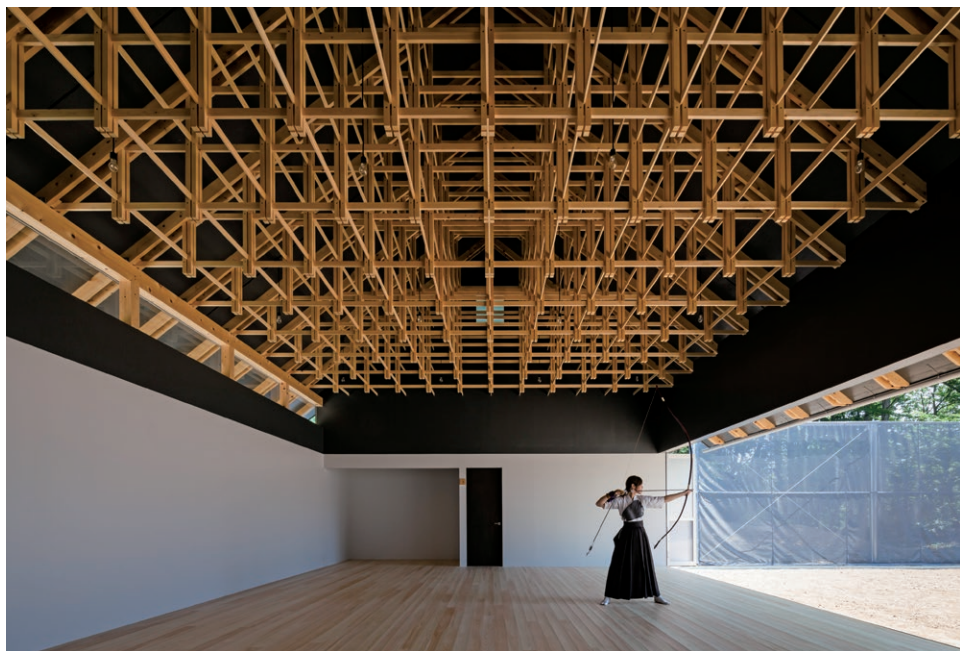
長谷川香料株式会社

機械式駐車設備 ● 納入事例

歴史を学ぶことで現在をデザインする

これまで、ものづくりの前提となる社会の既成概念を深く考えてきました。そのためには、歴史を勉強することがとても有効です。この2つの建築

は、一つは古い寺社建築、もう一つは伝統的な民家の形式を参考にしています。歴史を学ぶことは回顧主義に陥りがちですが、そうならないためには、歴史的なものの見た目だけでなく、そこで用いられている技術や素材と、その時代背景などを丁寧に調べる必要があります。そうすると、歴史的なものが現代のデザインに再利用することができるようになるのです。



工学院大学弓道場 撮影：小川重雄

最近、埼玉県本庄市にある120年前の倉庫の保存と活用の計画に携わっています。日本に現存する煉瓦の組石造建築としてはとても良いもので、屋根は木造で当時の最新技術であるトラス構造が用いられています。120年前の煉瓦とトラスを工学的に再評価し、耐震補強をして保存しながら新しい機能を与えて現代に活用するというこのプロジェクトは、私にとって新しいチャレンジになると思っています。

機械式駐車場の技術力の高さをもっとアピールすべき！

機械式駐車場は、一般のユーザーにはそのすごさがよくわからないですね。この技術の高さが見えないことは、機械式駐車場にとってとてももったいないことだと思います。機械的仕組みを見せたほうが絶対にいい。メディアでのアピールや、空

間の作り方かもしれませんが、たぶんメーカーの方が思われているよりも10倍ぐらいファンが生まれると思います。タワー式駐車場も、タワー自体の外皮に凝るのではなくて、その中身の技術力の高さをもっとアピールしてみたらいいと思います。



PROF I L E

福島 加津也 Katsuya FUKUSHIMA

1968年、神奈川県生まれ。1990年、武蔵工業大学(現東京都市大学)工学部建築学科卒業。1993年、東京芸術大学大学院美術研究科建築学専攻修士課程修了。1994～2002年、伊東豊雄建築設計事務所勤務。2003年～、福島加津也+富永祥子建築設計事務所。2014年～、東京都市大学工学部建築学科講師。

主な受賞

2004年、日本建築家協会JIA新人賞。2004年、グッドデザイン賞。2007年、住宅建築賞金賞。2013年、日本建築学会著作賞。2014年、International Architecture Award。2015年、日本建築学会賞(作品)。

主な作品

「中国木材名古屋事業所」、「e-HOUSE」、「柱と床」、「木の構築 工学院大学弓道場・ボクシング場」、「光の小屋」、「四つの柱」。